

陸上競技コーチング学の体系化に向けた実践研究のあり方について — 根拠に基づく実践の最適化を目指して —

森丘保典¹⁾ 福田厚治²⁾ 田内健二³⁾ 木越清信⁴⁾ 榎本靖士⁴⁾

1) 日本大学 2) 兵庫県立大学 3) 中京大学 4) 筑波大学

はじめに

教育学者パウロ・フレイレ (Paulo Freire) の「すぐれた実践は、理論に基づいており、内省を媒介として、新たな理論を生み出す」という一節を引くまでもなく、実践と理論の関係性や統合の重要性については、いわゆる「科学」や「技術」の発展史のなかで繰り返し確認されてきたことといえる。一方で、中村 (1992) は、チャーホフの『手帖』にある『ある控えめな男のためにお祝いの会が開かれた。集まった人々は、ちょうどいい機会とばかり、てんでに自慢するやら、褒め合いをするやらで時間の経つのを忘れた。食事も終わろうという頃になって人々が気づいてみると一当の主人公を招くのを忘れていた』という一文を引きながら、「近年いよいよ明らかになってきている既成のさまざまな理論や学問と現実とのずれを見ていると、この話を思い出してしまう。集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい理論や学問であり、主人公にあたるのは〈現実〉である」と指摘する。

「アスリートセンタード」を持ち出すまでもなく、スポーツの「主人公」は、個々のアスリートやプレーヤーとその「実践 (の場)」であることは言を俟たない。しかしながら、図1 (Knudson and Morrison, 1997) にあるような、ゴルファーのスイングを改善しようとしている3人の支援者が、自分の専門以外の分野にまたがる多くの要因に頓着することなく、主人公そっちのけで自説を誇示する光景は、それほど珍しいものでもない。したがって、「実践を研究するとは？」という問いを立てながら、「よく言われるような理論と実践の関係系が科学から実践への一方的な上意下達を意味してはならないし、実践的という意味が単に実用的に役に立つと同義に理解されてはならない」(金子, 2000) という指摘の意味について再考する必要がある。

体育・スポーツ科学に関連する学術雑誌において、実践に関する研究 (論文) はどのような定義づけがなされているのだろうか。日本体育・スポーツ・健康学会 (機関誌名: 体育学研究) では、「実践研究」という論文の種類があり、「現場からの貴重な情報を基にした研究で、指導法に関する実用的研究や、総合的に分析した研究が含まれる」という内容が示されている (日本体育・スポーツ・健康学会, online)。また、日本コーチング学会 (機関誌名: コーチング学研究) では、原著論文のなかに「実践論文: スポーツ実践や関連事象について、実験や各種調査などによる仮説検証を通して、新規性と普遍性の高い原理や原則を明らかにし、コーチング学の発展に直接的に寄与する論文」と「事例研究: コーチング学における種々の問題に対して、事例をもとにして、新規性と普遍性の高い原理や原則を明らかにし、コーチング学の発展に直接的に寄与する論文」という種類と内容が設けられている (日本コーチング学会, online)。さらに、日本陸上競技学会 (機関誌名: 陸上競技学会誌) では、「実践」と銘打つ種類は設けられていないが、「原著論文: 陸上競技およびこれに関連する分野の学術上および指導・



図1 科学的コーチング!!

実践上価値のある新しい研究成果を記述した原著論文、「事例報告(ケース・レポート):陸上競技の実践において、現場で実際に行った事実(コーチングやトレーニングの活動)を事例として正確に記述し報告したレポートであり、指導者や選手の活動実践に直接役立つもの」など、実践(事例)という文言が含まれる内容が示されている(日本陸上競技学会, online). 主なキーワード(センテンス)を抽出すると、「新規性と普遍性の高い原理や原則(の明確化)」から、「実験や各種調査などによる仮説検証」や「選手を総合的に分析した研究」、さらには「指導・実践上価値のある新しい研究(成果)」「指導法に関する実用的研究」「指導者や選手の活動実践に直接役立つもの」などに至るまで、その定義づけや射程は極めて多様かつ曖昧であるといえる。

本特集は、陸上競技の走・跳・投種目の専門家が実践研究(論文)を執筆し、著者間で相互に査読し合うことを通して、陸上競技コーチング学の体系化に向けた実践研究のあり方について検討することを目的として企画されたものである。

エビデンスとナラティブ

Guyatt (1991) が提唱した「根拠に基づく医療(Evidence-based Medicine: EBM)」は、「臨床家の経験やカンではなく科学的根拠(エビデンス)を重視して行う医療」と説明される場合があるが、本来は「研究によって得られた最良の根拠と臨床家の経験、そして患者の価値観を統合し、よりよい患者ケアに向けた意志決定を行うもの(傍点筆者)」とされている。また、このEBMにおいて、実際にエビデンスを患者や一般市民に「伝える」局面では、専門的な知見をいかに伝えるか、またその理解および反応をどのように研究者にフィードバックさせていくかが大きな課題となっており、さらにそれを「使う」局面では、エビデンスが医療現場で「使われなさ過ぎる(無関心)」問題と、エビデンス信奉ともいふべき「使われすぎる(無批判)」問題が併存するという「エビデンス・診療ギャップ」の存在も指摘されている(中山, 2010)。このような問題を踏まえて、患者自身が語る「ナラティブ(物語)」から病の背景を理解し、抱えている問題に対して全人的なアプローチを試みようとする臨床手法(Narrative-based Medicine: NBM)の重要性も指摘されている(斎藤, 2014)。医療には、いわゆる科学的なエビデンスが不可欠であるが、実際の患者に相對すると、それだけでは対応しきれない場面が多々あることは

容易に想像できる。先のエビデンス・診療ギャップは、そのことに起因すると考えられるが、そこで登場するのが「NBMでEBMを補う」という考え方である。ともすれば対立的な概念とみられがちであるEBMとNBMであるが、医療の現場では、「疾患(disease)」の理解にはEBM、悩みや苦しみをともなう「病氣(illness)」の理解にはNBMという位置づけがなされている。病氣や症状を単なる生物学的な問題としてだけでなく、心理的・社会的な問題として統合的に捉えるという視点をもつNBMは、データ中心のEBMから患者中心のEBMに移行するために欠かせないアプローチになる(菊池, 2002)。

このように、エビデンスを「伝える」「使う」ために患者の個別性に目を向ける必要性が高まるなかで、EBMを補完する機能としてのNBMが認められてきたことは言うまでもないが、そのような補完機能のみならず、語ること自体の治療的意義も示されており(岡島, 2008)、いまやEBMとNBMは“車の両輪”であるべきと主張されている(谷田, 2007)。上記のEBM(NBM)における「臨床家」を「コーチ」「患者」を「アスリート、プレイヤー」「医療、治療、ケア」を「コーチング、トレーニング」に置き換えれば、スポーツ現場の実践(研究)に関わる指摘として読み替えが可能である。このことは、人間が生物としての普遍性をもつと同時に個別性という要素を持ち合わせており、どちらの研究に偏っても健全な発展が望めないことから、従来型の普遍性を追究する科学研究とそれだけでは解明できない個別性の問題を追究する実践研究の棲み分けを図り、車の両輪のように、互いの長所を提供し合うとともに、限界を補完し合って前進すべきであるという山本(2018)の指摘とも重なり合うものである。

量的研究と質的研究 — 個別性と普遍性(一般性) —

奥野(2011)は、エビデンスとナラティブには明確な相違点があると前置きしたうえで、二つの概念は両極のものではなく連続的なものであるという捉え方を提示する。なぜなら、各研究法におけるエビデンス(普遍性)の強度は下から上にいくほど強まるが、反対にナラティブ(個別性)の強度は下に行くほど強まると考えられることから、この二つの概念には、その強弱によって連続性があるという視点に立つことができるからである(図2:津谷(1998)を著者改変)。臨床における実践を扱う一般的な研究デザインは、エビデンスレベルが一番下から三番目までの範疇、すなわち「事例(症例)研究・報告」



図2 エビデンスとナラティブの強さの連続性

「事例 (症例) シリーズ」「事例 (症例) 対照研究」の 3 つの研究法であることが多い (津谷, 1998). これらの研究法をあえて「質的研究」と「量的研究」に分類するならば、「症例報告 / 事例研究」は質的研究であり、「事例 (症例) 対照研究」から上が量的研究に相当するが、その間に位置する「事例 (症例) シリーズ」には両方の要素が混在しているといえる (奥野, 2011). 量的研究では科学的な方法論を取り入れ、データに基づく統計的・客観的視点による「普遍性」の追究が重視されるが、質的研究は科学的データのみならず、患者やクライアントとの対話を心理社会的背景も併せて記述し、治療に至るプロセス、援助者とクライアントとの関係性をふくめた「個別性」を明らかにする (岸本と齋藤, 2005).

スポーツのコーチングのプロセスを「時間軸」として捉えれば、量的情報は、あくまでも「初期条件」に過ぎない。改めて言うまでもないが、人間 (のパフォーマンス) は、初期条件によってすべて規定されるわけではなく、環境や相手との「相互作用」により変化するものであり、そのことが実践の分析・評価をより複雑かつ困難なものにしているといえる。例えば、「薬効」という初期条件が確定している薬であっても、服用する人間によって正負の効果の現れ方が異なるだけでなく、初期条件がゼロであるはずの偽薬にもプラセボ効果が発現することなどは、いわゆるナラティブのみでの支援可能性を示唆している。このように考えていくと、エビデンスとはひとつの「情報」であり、ナラティブの中で活用されてこそ機能が発現することになる (奥野, 2011).

そもそも研究の「方法」が「何かを行うための手段」である以上、その正しさは「目的」に応じて決まるものであり、だとすればすべての条件を取り払った

うえで「絶対的に正しい方法」はあり得ない。「測る」ことによって数値化できる量的な情報に比べて、選手やコーチの意図や意識、得られた感覚や感触 (コツやカン) といった質的な情報および情報化のプロセスは「情報化」されにくいという側面があるが、実践知の本質は量と質の「階層差」にこそ存在するものである (森丘, 2008). したがって、質的研究と量的研究の階層差を意識しながら、それぞれの研究プロセスにおいて獲得された情報 (量的・質的データ) を統合する視点に立つことによる「個別性と普遍性の両眼視」 (吉田ほか, 2005) が求められる。

事例研究の重要性

専門家に必要とされる学問研究の知識を活用した「省察 (reflection)」と「判断 (judgment)」は、専門的知識と現実との結合、科学的知識と具体的経験の結合、すなわち理論と実践の結合によって教育され学ばれるという (佐藤, 2015). そして、この「理論と実践の統合」は、医師教育における臨床研究 (カンファレンス) や法曹教育における判例研究などの事例研究 (ケース・メソッド) によって遂行されてきたことから、専門職性を開発する教育においても、事例研究がその中核に位置づけられなければならないと指摘する。

事例研究では、個別事例を具体的に研究することを通して、研究者の視点を活かした現象の記述はもとより、モデルや理論の生成など、個別性を超えた一般性を提示することが重要であるとされている (下山, 2000). また、「ひとつの症状について何例かをまとめ、それについて普遍的な法則を見出すような論文よりも、ひとつの事例の赤裸々な報告の方が、はるかに実際に役立つ」という河合 (1986) の

表1 帰納と演繹の特性

	演繹 (abduction)	広い意味での帰納 (induction)		
		枚学的帰納法	アブダクション	アナロジー
例	AならばB、A、ゆえにB (モードゥス・ポネンス) AならばB、Bでない、ゆえにAでない (モードゥス・トレンス)	a1はPである a2はPである … (きっと) 全てのAはPである	Aである Hと仮定するとなぜAなのかうまく説明できる (きっと) Hである	aはPである aとbは似ている (きっと) bもPである
得意技	前提に暗に含まれていた情報を取り出す	個々の事例から一般化する	いちばん良さそうな説明へと推論する	類比的に知識を拡張する
		仮説を立てる		
真理保存性	○ (前提が真ならば必ず結論も真)	× (前提が真であることは結論が真であることを論理的には保障しない)		
情報量	増えない	増やす (結論には前提に含まれていなかった情報が付け加わる)		

指摘は、「個」の明確化が一般性を持つという逆説が存在する可能性を示唆している。

狭義の「科学(的)研究」の枠組みにおいては、「一般性」の低い(と考えられている)知見を提供する代表的な手法である「事例研究」の説明範囲の狭さを問題視するが、一般性の高い知見(理論)が、必ずしも多くの場合に有効とは限らないことにも留意すべきである。比喩的にいえば、「90%の人に当てはまるが、10%しか説明できない(一般性の高い)理論よりも、「10%の人にしか当てはまらないけれど90%説明できる(一般性の低い)理論のほうが、むしろ現場では役に立つことも少なくない(森丘, 2014; 2017)。

山本(2001)は、臨床における事例研究が、「臨床現場という文脈で生起する具体的事象を、何らかの範疇との関連において、構造化された視点から記述し、全体的に、あるいは焦点化して検討を行い、何らかの新しいアイデアを抽出するアプローチ」であり、事例研究を一般化する妥当性の理由として、①典型例の抽出と分析であること、②事例から理論モデルを組み立てること、③個別事例の中にくり返されるパターンを抽出した上で、他事例における適合性を確認しつつ、理論モデルを形成してゆくこと、④単一事例で抽出された仮説を他の事例における実践の中で、累積的に検証してゆくこと、の四点を挙げている。したがって、事例研究では、「単なる事例の提示に終わらず、そこから一步発展し事例を通して個人を越えた普遍的な新知見を探求・創造」(図子, 2013)する必要があるといえるだろう。

実践と理論の統合にむけて

佐藤(2015)は、専門家教育における理論と実践は三つの関係をもっているという。第一は、「理論

の実践化(theory into practice)」である。この立場においては、実践は理論の適用範囲であり、「最も有効な(正しい)方法」が一つあると仮定され、それを実証する科学研究によって実践の改善が行われることとなる。第二は、優れた実践の一般化または典型化によって、優れた実践を生み出す一般的な原理や技術を抽出することを追究する「実践の理論化(theory through practice)」の立場である。このような多様な典型事例を専門家間で共有することは、実践の改善と専門家としての成長にとって極めて有効であるが、同時に、優れた実践の典型化によって一般的な原理や技術を抽出することの困難さや、そもそも何が優れた実践かを特定することの難しさなどの問題が潜在しているという。そして第三は、あらゆる実践は意識的、無意識的な理論を内包し、その理論によって遂行されているという考え方に基づく「実践の中の理論(theory in practice)」を研究する立場である。この「実践の中の理論」を研究するプロセスにおいては、実践に内在している理論を省察し、その理論を内省し変容することによって実践を改善することが求められる。

実践を伴う理論的考察においては、個々の特殊な事例から一般原理や法則を導き出したり(帰納)、逆に一般的な原理から個々の事実や命題の推論(演繹)を行うが、枠にはまらずありとあらゆる知識と経験を活用し、実践にとって有用な仮説を生成しようとする仮説的推論を重視する必要がある(村木, 2010)。戸田山(2005)によれば、科学には「<正しい>には強いが<新しい>には弱い演繹」と「<新しい>には強いが<正しい>には弱い帰納」という二種類の推論が含まれており(表1)、これらを組み合わせることによって「新しくてかつ正しいことを言う」ことが可能になるという。この新しくて正しいことを言うための科学的推論の方法

は、演繹法と帰納法を組み合わせた「仮説演繹法 (hypothetico-deductive method)」と呼ばれ、自然科学だけでなく多くの社会科学も基本的にこの方法に基づいて営まれている。

<仮説演繹法>

- ① これまでの経験や手持ちのデータを用いて問題を発見する。
- ② 帰納的推論（一般化やアナロジーなど）を用いて仮説を立てる。
- ③ 仮説から演繹的推論により予言（予測）を導く。
- ④ 予言の確度を実践（観察や実験）によって検証または反証する。
- ⑤ 予言の当否（実践の結果）に基づき仮説を受け入れる、または修正する。

仮説演繹法とは、帰納的な営みとしての「実践の理論化」と、演繹的な営みとしての「理論の実践化」を往還しながら、「実践の中の理論」の研究によって「理論と実践を統合」していくことにほかならない。この一連のプロセスは、体育・スポーツを扱う実践研究においては、対照（コントロール）群がなくてもよい、研究対象は一人でもよい、確からしさは95%以上でなくてもよいが、Christensen (1997) が提示する科学の方法論の4つの段階、すなわち第1段階でその現象を記述し、第2段階でその現象を説明し、第3段階でその説明をもとに次の段階を予測し、第4段階で対象に働きかけて予測の正しさを確認し、同業者にとって役立つ知見を提供することが求められる（山本, 2018）という指摘にも通底するといえる。

実践研究に求められるもの

冒頭でも述べたように、本特集においては、著者間の相互査読を行った。一人の著者から「それぞれの論文が、①実践するための研究（実践するために活用できるデータをまとめたものであり、既存の横断研究もこれに該当する）、②実践した研究（客観的に確立された（されつつある）理論に基づいて、当該選手の評価、介入、成果を記述するもの）、③実践の記述（文字通り実践した内容を記述するというものであり、指導現場の実態を文章として残すもの）の3つに分類できる」というコメントがあった。この指摘は、先の理論と実践の3つの関係に対応する実践研究のカテゴリーと見ることができるだろう。

以下に、主なコメントを列記する。

- ・個別性と共通性の両方を説明することにより、実践研究としてのオリジナリティが出てくる。
- ・測定結果を踏まえて、新たな評価基準やトレーニングに対する新しい考え方の提案などが示されれば、統計処理がなくても実践研究としての価値が高まる。
- ・現場の指導では、あらゆる情報を基にして選手のパフォーマンスをより適切な方向へ導こうと努力するが、要素をできるだけそぎ落とし、最もアピールしたい部分にクローズアップして記述すべき。
- ・実践の前提となる理論的背景（課題）、選手の評価、および成果だけでなく、ターゲット（ねらい）を明確にした具体的な実践（介入）方法を詳述すべき。

市川 (1999) は、日本教育心理学会の機関誌に「実践研究」というカテゴリーを設けるにあたり、当該学会の編集委員が様々な学術誌における公刊済みの関連論文を改めて査読し、その内容を分析したところ、評定の水準や観点の個人差は極めて大きかったという。そして、評価に関わる要因とその問題点（改善点）として、「実践研究としての評価も、従来の学術研究的な緻密な分析・記述に引きずられてしまう評定者が多いので、別の基準に沿うことが望ましい」ことや、「実践に関わる「研究」と「報告」の差別化は難しいが、少なくとも実践や開発のプロセスを漫然と記述するだけでなく、依拠したモデル（理論）、データに基づく自己内省的な評価、さらには実践への示唆などを含める必要がある」ことを示唆している。

実践研究者の視点から構築された領域固有の理論は、様々な他者に公開されることによって、精緻化され、新たな実践研究へと向かっていくことが重要であるが（広瀬ほか, 2010）、スポーツ科学において他者に該当するのは、研究者相互はもとより、コーチやアスリート（プレーヤー）なども含まれるといえるだろう。以上を踏まえれば、実践研究においては、実践に対する問題意識と他者理解を得るための理論構築、そして自身を含む実践の内実を理論として他者に提示すること、さらにはその方法そのものを探究するプロセスのいずれも不可欠であることを示唆しているといえる。なお、市川 (1999) は「最後に一言申し上げたい」と前置きした上で、「論文の評価と言うものが、いかに個人差が大きく、しかも自分の評価の特性はなかなか本人にはわかりに

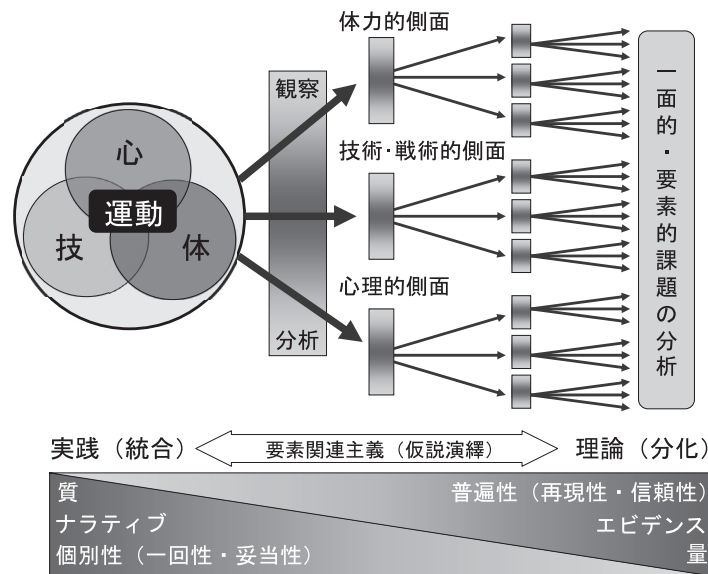


図3 実践と理論の往復（循環）による知の創出

くいと言うことを、これから審査員となる委員には知っていただきたい」と述べるとともに、「それぞれの審査者が自分の基準に固執するならば、どの審査者も満足できるような極めて稀な論文しか認められないことになってしまう」という懸念を示していたことを、実践研究を推進するための重要な指摘として付記する。

根拠に基づく実践に向けて —「還元」主義から「関連」主義へ—

「科学というものには、本来限界があって、広い意味での再現可能の現象を、自然界から抜き出して、それを統計的に究明していく、そういう性質の学問である」（中谷，1958）。既存の諸科学の研究成果を寄せ集めることによって現場の問題を解決するという考えから出発している学際応用理論は、研究領域が細分化すればするほど統合することが難しくなるというアポリアを孕んでいるだけでなく、自然科学的研究パラダイム（還元主義的研究方法論）に制約されていることから、個別種目の指導理論から帰納的に一般理論を構築することを目指した実践知の集積には繋がっていない（朝岡，2010）。

私たちは、本来、不可分の全体（分けられないもの）として成立している「運動（競技パフォーマンス）」を便宜的に「心理」、「技術（戦術）」および「体力的側面」に分けて観察や分析（研究）を行うが、研究的に扱われる事象は、実際の運動ではなく、観察者の意図と観測方法に依拠する運動の断片的一面に過ぎない（図3：村木（2005）を著者改変）。そもそも観察・分析とは、ある部分に焦点化するために他

の部分を見捨てる行為でもあるため、細分化（図3の右方向）するほど捨象される要素が多くなることは必然であり、「そこでの観測結果が代表する一部を、認識した世界（運動）の实在性へとく安易に>移行させることは論理的飛躍であり科学的必然性はない」（村木，2007；<安易に>は筆者加筆）といえる。したがって、実践を通して得られた多様な情報（データ）を新たな実践に向けた不断の改善に役立てるためには、捨象された要素間の相互作用（関連性・相補性）について可能な限り考慮しながら、心・技・体の総体としての運動（競技パフォーマンス）全体を統合的に理解しようとする「科学的態度」が求められる。

「実験によって、そのものの具体的な性質、あるいは現象間のつながりが知られたとしても、それだけでは学問とはいえない。いわゆる学問の定義の中に入るには、そういう知識に、ある体系が組み立てられなければならない。体系ができてはじめてそれが役に立つことになる」（中谷，1958）。上記の科学的態度の要諦は、実践研究が動的な構造をもった「科学（エビデンス）を利用する科学的な営み＝実践科学」（斎藤，2018）であるという認識のもとに、要素「還元」主義から「関連」主義へのパラダイムシフトによる“不可逆性”への挑戦、すなわち「エビデンスとナラティブ」、「個別性（一回性・妥当性）」と普遍性（再現性・信頼性）、「量（的研究）」と質（的研究）」などの二項対立の超克を企図した研究の蓄積と体系化を目指すことにある。学体系の確立にとって特に重要な課題は、種目横断的な共通問題を扱う一般理論の体系化と、膨大な個別スポーツ種目の大部分を網羅的に包含しうる類型的グループ化

(村木, 2010) にある. その前提としてコーチや体育教師が現場の中で意欲的に取り組むことのできる研究方法論の確立や, 専門的な実践研究(論文)を蓄積(査読)するための独自のシステム構築が必要不可欠(図子, 2010)であることは言うまでもない.

本特集が, 実践研究として独自の方法論を見だし, 陸上競技におけるコーチングやトレーニングの研究(知の創出)を発展させる端緒となれば幸いである.

文献

朝岡正雄(2010) 学際応用理論という名のアポリア. スポーツ方法学研究, 23 : 105-110.

Christensen, L. B. (1997) *Experimental Methodology* (7th Ed.). Allyn Bacon, Boston, pp. 26-29.

Guyatt, G. (1991) Evidence-based medicine. *ACP Journal Club*, 114, A-16.

広瀬和佳子, 尾関史, 鄭京姫, 市嶋典子(2010) 実践研究をどう記述するか—私たちの見たいものと方法の関係—. 早稲田日本語教育学第7号; 43-68.

市川伸一(1999) 「実践研究」とはどのような研究をさすのか: 論文例に対する教心研編集委員の評価の分析. 教育心理学年報, 38 : 180-187.

金子明友(2000) スポーツ科学における理論と実践のあいだ. 日本女子体育大学附属基礎体力研究所紀要, 10 : 41-49.

河合隼雄(1986) 事例研究の意義と問題点—臨床心理学の立場から—. 河合隼雄 心理療法論考. 新曜社: 東京, pp. 288-296.

菊地臣一(2002) 腰痛概念の革命—生物学的アプローチから心理・社会的アプローチへの転換—. 心身医学, 42(2) ; 105-110.

岸本寛史・斎藤清二(2005) 新しい人間科学的研究法としての事例研究—ナラティブ・ベイスト・メディシンの視点から—. 心身医学, 46(9) : 789-797.

Knudson, D. V. and Morrison, C. S. (1997) *Qualitative analysis of human movement*, 2nd edition. Human Kinetics: Champaign.

森丘保典・山崎一彦(2008) 陸上競技男子400mハードル走における最適レースパターンの創発: 一流ハードラーの実践知に関する量的および質的アプローチ. トレーニング科学, 20 : 175-181.

森丘保典(2014) コーチング学における事例研究の

役割とは?: 量的研究と質的研究の関係性. コーチング学研究, 27 : 169-177.

森丘保典(2017) コーチング学の体系化に向けたスポーツ科学の役割とは: スポーツ科学研究の射程. スポーツ科学研究, 1 : 23-31.

村木征人(2005) トレーニング理論とその方法. 公認スポーツ指導者養成テキスト(共通科目Ⅲ), 102-111, 日本体育協会, 東京.

村木征人(2007) 相補性統合スポーツトレーニング論序説. スポーツ方法学研究, 21(1) : pp. 1-15.

村木征人(2010) コーチング学研究の小史と展望. コーチング学研究, 24 : 1-13.

中村雄二郎(1992) 臨床の知とは何か. 岩波書店, 東京.

中山健夫(2009) エビデンス: つくる・伝える・使う. 体力科学, 59 : 82-83.

中谷宇吉郎(1958) 科学の方法. 岩波新書, 東京. 日本コーチング学会(online) 投稿の手引き. <https://jcoachings.jp/jstage/jstage-guidance/> (2022年2月28日閲覧)

日本陸上競技学会(online) 投稿規程. <http://jsa-web.com/wp/wp-content/uploads/kitei4.pdf> (2022年2月28日閲覧)

日本体育・スポーツ・健康学会(online) 投稿の手引き. https://taiiku-gakkai.or.jp/kinanshi/pdf/kenkyu_toukoutebiki.pdf (2022年2月28日閲覧)

岡島美朗(2008) 身体表現性障害と語り—NBMにおける語りの治療的意義の検討—. 心身医学, 48(11) : 965-970.

奥野雅子(2011) ナラティブとエビデンスの関係性をめぐる—考察—. 安田女子大学紀要, 39 : 69-78.

斎藤清二(2014) ナラティブ・ベイスト・メディシン再論. 学園の臨床研究, 13 : 1-9.

斎藤清二(2018) エビデンス・ベイストとは何か—ナラティブ・アプローチの観点から—. 日本認知・行動療法学会第44回大会抄録集, 71-71.

佐藤学(2015) 専門家としての教師を育てる. 岩波書店; 東京.

下山晴彦(2000) 事例研究. 下山晴彦編著 臨床心理学研究の技法. 福村出版: 東京, pp. 86-92.

谷田憲俊(2007) EBMとNBM. 山口医学, 56(6) ; 189-191.

津谷喜一郎(1998) 集団に効くことと個人に効くこと—「効き目」のコミュニケーション— 日本東洋医学雑誌, 48(5) ; 569-598.

戸田山和久(2005) 科学哲学の冒険: サイエンスの

- 目的を探る. NHK ブックス, 東京.
- 山本正嘉 (2018) 体育・スポーツの実践研究はどうあるべきか. 福永哲夫・山本正嘉 (編) 体育・スポーツ分野における実践研究の考え方と論文の書き方. 市村出版 : 8-30.
- 山本力 (2001) 心理臨床実践と事例研究. 研究方法としての事例研究. 山本力・鶴田和美編 心理臨床家のための「事例研究」の進め方. 北大路書房: 京都, pp. 2-29.
- 吉田美穂子, 奥野雅子, 石井佳世, 花田里欧子, 長谷川啓三 (2005) 臨床に役立つ基礎研究開発に向けて—相互作用の視点から—. 日本家族心理学会第 22 回大会発表論文集 : 19-20.
- 図子浩二 (2010) スポーツ選手や指導者に役立つ実践の学としてのコーチング学の一つの方向性. スポーツ方法学研究, 23 : 99-104.
- 図子浩二 (2013) コーチング学研究投稿規定および投稿の手引きの改定に関するお知らせ. コーチング学研究, 27 : 0.